モリエール年のコメディ・フランセーズ

著者	榎本 恵子
雑誌名	コミュニケーション文化論集
巻	21
ページ	1-20
発行年	2023-03-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00007462/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

モリエール年のコメディ・フランセーズ

The Molière Year at the Comédie-Française

榎　本　恵　子

序論

2022年はジャン＝バティスト・ポクラン、モリエール Jean-Baptiste Poquelin, dit Molière 生誕400年、2023年は没後350年であり、今フランス国内外で演劇、講演会、シンポジウム、展覧会が開催されている。モリエールは1622年1月15日パリで生まれ、1673年2月17日パリで亡くなった。コルネイユ Pierre Corneille（1606-1684）、ラシーヌ Jean Racine（1639-1699）と並ぶ17世紀三大劇作家の一人であり、フランス最初の劇作家兼役者兼劇団の座長である。「フランス喜劇の父」としての評価は生前から現在まで至る。

モリエールは時の国王ルイ14世の寵愛を得、また同時代人からすでに評価されていた。ナポレオン・ボナパルトは帝政時代の改革で、モリエールを国民として学ぶべき重要な作家のひとりとして学校教育の中に取り入れた。その影響もあって現代でもモリエールの作品は初等教育、中等教育のプログラムに含まれている。日本の中学校にあたるコレージュでは『いやいやながら医者にされ』*Le Médecin malgré lui*、『スカパンの悪だくみ』*Les Fourberies de Scapin*、『飛び医者』*Le Médecin volant*、『シシリー人あるいは恋は画家』*Le Sicilien ou l'Amour peintre*、『恋は医者』*L'Amour médecin* が好まれ、高等学校にあたるリセでは『人間嫌いあるいは怒りっぽい恋人』*Le Misanthrope ou l'Atrabilaire amoureux*、『守銭奴』*L'Avare*、『女学者』*Les Femmes savantes*、『タルチュフあるいはペテン師』*Le Tartuffe ou l'imposteur*、『病は気から』*Le Malade imaginaire*、『町人貴族』*Le Bourgeois gentilhomme*、『女房学校』*L'Ecole des femmes* が学習教材になっている[1]。モリエールの作品は、17世紀が舞台であるものの人間の普遍的な問題を扱っているために人々に親近感を与え色褪せず、作品を離れ一般名詞化している登場人物もいる。「ドン・ジュアン」といえば、プレイ

ボーイを意味し、「タルチュフ」といえば偽善者、「アルパゴン」といえば吝嗇家といった具合にである。

本稿では「モリエールの家」とも呼ばれる国立劇団コメディ・フランセーズに焦点を当て、モリエールとの関係、モリエール年の公演を紹介し、そこから浮き彫りになるフランス人にとってのモリエールの位置づけを確認したい。

I. コメディ・フランセーズ、「モリエールの家」

モリエールは大学を卒業した後1643年、マドレーヌ・ベジャール Madeleine Béjart（1618-1672）とパリで盛名座を立ち上げた。劇場に掌球場を使っていたが[2]劇場使用料を払えなくなり、1645年から13年間パリを離れ、フランス国内巡業の旅に出る。

1658年ルイ14世の弟フィリップ1世の庇護、続いて国王ルイ14世の寵愛を得、プチ・ブルボン劇場をイタリア人劇団と交互に使うことを許される。ルーヴル宮殿改築のためプチ・ブルボン劇場が取り壊されると、パレ・ロワイヤル[3]を与えられ、1661年から1673年まで生涯の本拠地とした。

モリエールの死後、彼のコメディ・バレの音楽を担当していたジャン＝バティスト・リュリ Jean-Baptiste Lully（1632-1687）がパレ・ロワイヤル劇場使用権を獲得し、王立音楽アカデミーとした。そのため1680年、モリエール劇団は国王の命でゲネゴー座、オテル・ド・ブルゴーニュ座を統合させた王立劇団を組織した。それが現在の国立劇団コメディ・フランセーズであり、初めはゲネゴー座（60, Rue des Archives, 75003）で活動をした。1799年現在の場所（Place Colette, 75001）に移り、国立劇団の形態が整えられていった。

1680年劇団設立時のメンバーは27名で、地方巡業中からのメンバーであるド・ブリ嬢 Mlle. De Brie が1番、デュ・クロワジー Philibert Gassot Du Croisy, dit Du Croisy が2番、役者兼秘書兼会計係を務めた、モリエールの右腕ラ・グランジュ Charles Varlet, dit Sieur La Grange が3番、モリエールと結婚したアルマンド・ベジャール Armande Béjar, dit Mlle. Molière が4番と続く。現在37名いるソシエテール sociétaire と呼ばれる正座員は1680年劇団設立時のメンバーから連番で続いており、37番目の正座員は538番である[4]。モリエールの精神を引き継いだこの王立劇団が通称「モリエールの

家」と呼ばれるようになったのは18世紀のことである。

劇場は現在リシュリュー館、ヴィユ・コロンビエ劇場（21, Rue du Vieux Colombier, 75006）、ステュディオ劇場（99, Rue de Rivoli Place de la Pyramide Inversée, 75001）の3つある。それぞれ862席、309席、136席である[5]。

リシュリュー館のエントランスからサロンに向かう階段を含めた部分は19世紀の建築で、天井の四隅にはモリエール、コルネイユ、ラシーヌ、ヴォルテール Voltaire（1694-1778）の名前と生没年のレリーフ、悲劇、喜劇の仮面を持った女神像とラ・フォンテーヌ La Fontaine（1621-1695）、フィリップ・キノー Filippe Quinault（1635-1688）の彫刻が置かれている。2階のサロン Le Foyer Pierre-Dux のバーカウンターの上に1900と彫られたレリーフがあるが、それは火事があった後修復された年である[6]。サロンの暖炉の上にはウードン Houdon 作のモリエールの胸像があり、部屋の反対側には椅子に座っているヴォルテールの像が対峙して置かれている。この部屋にはその他ロトルー Jean de Rotrou（1609-1650）、コルネイユ、ラシーヌ等の胸像もある。サロンを出た廊下は胸像のギャラリーとなっている。また楽屋や関係者の部屋、会議室等至る所にパトロンであるモリエールの像や肖像画が置かれている[7]。

II. モリエールへのオマージュ

モリエールの記念祭を初めて遂行したのは没後100年の1773年で、当時の劇団員随一の悲劇俳優ルカン Lekain（1729-1778）の働きによる[8]。命日2日前の2月15日『タルチュフあるいはペテン師』の特別公演、新作ジャン＝バティスト・アルトー Jean-Baptiste Artaud による『モリエール100年祭』*La Centenaire de Molière* とモリエール礼賛で幕を閉じるオーギュスタン＝テオドール＝ヴァンサン・ルボー・ド・ショーヌ Augustin-Théodore-Vincent Lebeau de Scosne の『集合』*L'Assemblée* が上演された。5年後ウードンによる大理石の月桂樹の冠を被ったモリエールの胸像が完成すると、胸像を中心に劇団員が舞台に一堂に会する儀式が行われるようになった。

19世紀になり、ルイ＝フランソワ・ブッファラ Louis-Françaois Bouffara によってモリエールが1622年1月15日にサン・トゥスタッシュ教会で洗礼を受けた日が明らかになると1822年劇作家の生誕祭を「オマージュ」と

して記念した[9]。これ以降毎年生誕祭を行うのが習慣になった。芝居の後、舞台上にモリエールの胸像を置き劇団員が囲むのである[10]。19 世紀には『病は気から』を上演することが多かった。1873 年は没後 200 年として芝居の他、イベントや講演会を開催した。

1922 年、生誕 300 年祭では、1 月のひと月がモリエール月間となり、『粗忽者』*L'Etourdi*、『才女気取り』*Les Précieuses ridicules*、『守銭奴』、『恋は医者』、『ドン・ジュアンあるいは石像の饗宴』*Don Juan ou Le Festin de Pierre*、『亭主学校』*L'Ecole des maris*、『プールソーニャック氏』*Monsieur de Pourceaugnac*、『病は気から』、『デスカルバニャス伯爵夫人』*La Comtesse d'Escarbagnas*、『町人貴族』、『タルチュフあるいはペテン師』、『女学者』、『スカパンの悪だくみ』、『人間嫌い』*Le Misanthrope*、『シシリー人もしくは恋は画家』、『スガナレルあるいは疑りぶかい亭主』*Sganarelle ou le Cocu imaginaire*、『女房学校』、『「女房学校」批判』*La Critique de* l'Ecole des femmes、『ヴェルサイユ即興劇』*L'Impromptu de Versailles*、『ジョルジュ・ダンダンあるいはやり込められた亭主』*George Dadin ou le Mari confondu*、『うるさがた』*Les Fâcheux*、『いやいやながら医者にされ』、『アンフィトリオン』*Amphitryon*、『ゴリ押し結婚』*Le Mariage forcé* の 24 作品 35 公演が上演された[11]。

2022 年の生誕 400 年祭は 1 月 15 日から 7 月 25 日までを「モリエール年」としてモリエールの作品のみを上演した。1 月 15 日は『タルチュフ』の復刻版の初演で、芝居の後、劇団員が一番新しい準座員から始まりドワイエンヌのクロード・マテューにいたるまで、順に舞台に集まり、それぞれモリエールの作品の中から一つずつ台詞を言うオマージュが行われた。モリエールの専門家であるソルボンヌ大学名誉教授のジョルジュ・フォレスティエやコメディ・フランセーズ図書館司書のアガット・サンジュアンらとの対談、支配人エリック・リュフ、正座員、準座員へのインタヴューを含め当日の様子を 17 時 30 分から 6 時間かけて録画しインターネットにアップした。現在も見ることができるが当日は同時配信した[12]。『タルチュフ』の公演は映画製作会社パテが限定配信した。コメディ・フランセーズはフランス中の演劇を目指す高校生、グランゼコール準備学生ら 200 名以上を招待した[13]。また、この日の公演は無料なので当日券を求めて 100 人以上が並ぶ様子が録画で放映されていた。

2023年はモリエールの3作品の上演が決まっている。1月15日は没後350年ではなく生誕401周年として千秋楽『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』*Jean-Baptiste, Madeleine, Armande et les autres*…に続いてオマージュが行われる。100名が1月5日の抽選で招待され、当日券は100席ほど配布されるという[14]。そして芝居の始まる20時30分からエリック・リュフと新聞記者ジュディット・シェーヌ、ベリーヌ・ドラによる対談、21時からクレマン・ゴベールの未公開映像、22時からエリック・リュフ、ソルボンヌ大学教授フローランス・ノグレット、準座員のアドリアン・シミオンらを招いた対談、22時45分からカメラを舞台に回しオマージュの様子をインターネット同時配信することが予定されている。

II.　コメディ・フランセーズにおけるモリエール上演

コメディ・フランセーズ　シーズン2021-2022

2021-22年のシーズンに上演された、モリエールの作品は『タルチュフあるいは偽善者』*Le Tartuffe ou l'hypocrite*、『人間嫌い』、『病は気から』、『守銭奴』、『スカパンの悪だくみ』、『町人貴族』、『才女気取り』、『ゴリ押し結婚』の9作品である。その他、生誕400年祭を記念して新たに創作された『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』、『猿たちの黄昏』*Le Crépuscule des singes*が上演された。ヴィユ・コロンビエ劇場やステュディオ劇場では斬新な演出や一人芝居、即興劇も上演された。『人間嫌い』、『病は気から』、『スカパンの悪だくみ』を除く6作品が新しい演出である。上演された劇場と期間は次のとおりである。

・リシュリュー館

『タルチュフあるいは偽善者』演出イヴォ・ヴァン・ホーヴェ、公演期間1月15日から4月24日

『人間嫌い』演出クレマン・エルヴィユ＝レジェ　公演期間2月2日から5月22日

『病は気から』演出クロード・ストラッツ　公演期間2月21日から4月3日

『守銭奴』演出リロ・ボール　公演期間4月1日から7月24日

『スカパンの悪だくみ』演出ドニ・ポダリデス　公演期間4月22日から7月10日

『町人貴族』演出ヴァレリー・ルソー、クリスチャン・エック　公演期間5月7日から7月21日
『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』演出ジュリー・ドリケ　公演期間6月17日から7月25日

・ヴィユ・コロンビエ劇場
『ドン・ジュアン』演出エマニュエル・ドマス　公演期間1月29日から3月6日
『才女気取り』演出ステファン・ヴァリュペンヌ、セバスチャン・プドゥルー　公演期間3月25日から5月8日
『猿たちの黄昏』演出ルイーズ・ヴィニョー　公演期間6月1日から7月10日

・ステュディオ劇場
『夜は何処から輝くのか』（モリエール、リュリ、即興音楽）1月24日から3月6日
『モリエールの沈黙』ジョヴァンニ・マッチア（一人芝居：ダニエル・ルブラン）2月9日から27日
『決してアルセストにはなれない』（モリエール作品とルイ・ジュヴェの古典喜劇より）『3月24日から5月5日
『モリエール・資料』（一人芝居：ピエール・ルイ＝カリスト）4月6日から24日
『ゴリ押し結婚』5月26日から7月3日
「モリエールの女性たちの台詞から抜粋」（一人芝居：アンヌ・ケスレ）6月8日から29日

このシーズン、ヴィユ・コロンビエ劇場あるいはステュディオ劇場では観客の前での脚本読み À la table en public が企画された。衣装なし演技最小限の脚本読みの通し稽古の体を装っている。カメラマンが俳優たちをアップでスクリーンに映し出すことで、俳優たちの視線、台詞、間などを並行して見られるようにした。

リシュリュー館の最上階の屋根裏 au grenier では通常、俳優を招いて朗

読劇が行われるが、今シーズンはモリエールに特化したプログラムが用意された。プログラムは以下のとおりである。

・脚本読み

『ジョルジュ・ダンダンあるいはやり込められた亭主』2月7日　ヴィユ・コロンビエ劇場
『スガナレルあるいは疑り深い亭主』2月14日　ステュディオ劇場
『シシリー人あるいは恋は画家』3月7日　ステュディオ劇場
『プールソーニャック氏』4月4日　ヴィユ・コロンビエ劇場
『飛び医者』4月11日　ステュディオ劇場
『女学者』5月2日　ヴィユ・コロンビエ劇場
『デスカルバニャス公爵夫人』6月13日　ステュディオ劇場
『アンフィトリオン』6月20日　ヴィユ・コロンビエ劇場

・講演会 18時から

「タルチュフについて」ジョルジュ・フォレスティエ1月18日
「モリエールの演出について」クレマン・エルヴィユ＝レジェ　2月22日
「モリエールの家におけるモリエール」アガット・サンジュアン　3月29日
「モリエール、ロマン主義のアイドル」フローランス・ノグレット　5月10日

・朗読

「ミカエル・ブルガコフ『モリエール氏の物語』（抜粋）」シルヴィア・ベルジェ　2月1日
「アリアーヌ・ヌムーシュキンの映画『モリエール』をめぐって」ジェラルディーヌ・マルティノ　2月15日
「シラノ・ド・ベルジュラック『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』」ディディエ・サンドル　3月15日
「『タルチュフ』につけられたモリエールの序文」ロイック・コルベリ　4月5日
「ポール・スカロン『滑稽旅役者物語』（抜粋）」アラン・ラングレ　5月24日

「同時代人から見たモリエール」クロチルド・ド・ベゼル　6月7日

コメディ・フランセーズ　シーズン 2022-2023

2022-23年は通常に戻り、モリエール以外の作品も上演されるが、モリエール関連の作品として、『タルチュフあるいは偽善者』、『守銭奴』、『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』の3作品が再演される。演目、上演期間は次のとおりである。

・リシュリュー館

『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』10月12日から1月15日
『タルチュフあるいは偽善者』1月31日から3月19日
『守銭奴』6月2日から7月24日

III.　リシュリュー館の新作

今シーズン、リシュリュー館では特筆すべき二つの演目があった。『タルチュフあるいは偽善者』と『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』である。『タルチュフ』は一般に知られている版ではなく、初演と同時に即日上演禁止となった1664年ヴェルサイユ宮殿での公演の再現で、『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』はモリエール劇団の日常を舞台に再現したもので観客を17世紀のパリへと誘う作品である。

・『タルチュフあるいは偽善者』

1664年初演3幕ものの復刻版（ジョルジュ・フォレスティエ監修）
演出：イヴォ・ヴァン・ホーヴェ
主な俳優：ペルネル夫人（クロード・マチュ）、オルゴン（ドニ・ポダリデス）、クレアント（ロイック・コルベリ）、タルチュフ（クリストフ・モントネス）、エルミール（マリナ・アンツ）
観劇日：4月24日

エリック・リュフの依頼により、新進気鋭のベルギーの演出家イヴォ・ヴァン・ホーヴェはモリエール400年祭にジョルジュ・フォレスティエによ

る初演復刻版『タルチュフあるいは偽善者[15]』を演出した。

『タルチュフ』は1664年ルイ14世による最初のヴェルサイユでの祝祭「魔法の島の歓楽」6日目に上演され、即日上演禁止となった作品である。モリエールの再三の嘆願書にもかかわらず、再演が許可されるまでに5年の年月を要した[16]。タルチュフが敬虔な信者を演じる偽の姿が真の信者と教会に対しての冒涜であると母后アンヌ・ドートリッシュら教会の猛反対にあったからである。

現在我々が手にする『タルチュフあるいはペテン師』は五幕ものであるが、祝祭で上演された『タルチュフ』は三幕であった。マニュスクリが残っていないこと、ラ・グランジュの帳簿に「最初の三幕」と記されていたことから、五幕のうちの三幕なのか、未完の三幕なのか、それとも三幕ものであったのかという議論が長いこと為されてきた。ジョルジュ・フォレスティエは研究の末、三幕ものであったと確信した[17]。そこには主人公オルゴンの娘マリアンヌと恋人ヴァレールを描いた第二幕はなく、女中ドリーヌも芝居の主要な位置を占めなくなった。さらに第五幕のオルゴンの家族の窮地が救われ、タルチュフが罰せられる場面もない。フォレスティエはそれらを筋が通るように加筆修正して三幕の初演版を復刻した[18]。その結果主題がタルチュフとオルゴン、ペルネル夫人を取り巻く妄信的な信仰問題、オルゴンと息子との確執と家族崩壊、オルゴン、タルチュフ、エルミールのドロドロとした関係に絞られ、一つの家族のうちに内在する様々な問題が浮き彫りになった。今回の上演はその脚本を基にしたものである。

エルミールの知略でタルチュフの悪事を暴いても、オルゴン家は幸せな家庭に戻らない。オルゴンは目を覚ますが、未だ狂信的な母親ペルネル夫人と衝突し、母親の頑ななタルチュフへの信望を崩すことができないまま幕が下りる。

五幕ものの、国王陛下によってタルチュフの悪事が暴かれる大団円のタルチュフ逮捕劇は、イヴォ・ヴァン・ホーヴェも言及しているように、取ってつけた国王礼賛のニュアンスが強すぎて共感しにくい[19]。ホーヴェは、このデウス・エクス・マキナによる大団円がなくなり、結論がなくなったことで「オルゴン一家のその後起きるであろうことを自由に想像[20]」し、タルチュフとエルミールの関わりを物語の中心に据えた。「第二幕の終わりで、エルミールがタルチュフに面と向かって誘惑する策略[21]」の後「第三幕で彼との

性的関係が生まれることを阻むものはなくな[22]」ったからである。

またホーヴェはこの復刻版全体に漲る「野蛮と言ってもいいほど暴力的な力[23]」を遺憾なく表現する。その暴力性は舞台装置が助長した。簡素で装飾がほとんどなく劇場は壁や梁、天井が丸見えの状態である。両サイドに丸テーブルと椅子、舞台中央には長方形の白い敷物がある。その奥に階段がある。明かりはシャンデリアあるいは裸電球が、周りに張り巡らされた鏡で何倍にもなり煌めいていて舞台を照らし、花瓶に生けられた花が彩りを添えている。衣装は男の登場人物は白いワイシャツに黒を基調としたスーツ、女性は黒いワンピースか黒いパンツスーツである。役者は出番が来ると暗闇から舞台中央の敷物まで来てその縁でお辞儀をして敷物の上に入る。まるで何かの儀式かのように厳かに始まるのだが、登場人物の言葉や態度の端々に相手に対する冷ややかさが常駐する。クレアントのオルゴンへの説得も最後のオルゴンの母親への訴えも相手に届かない。エルミールとタルチュフの関係性が生々しく表現されることも手伝い、観客は常に緊張を余儀なくされ、息苦しさを感じる。もしこのバージョンが1664年の国王礼賛とその権力を顕示する「魔法の島の歓楽」という華やかな祝祭の中で上演されたとすれば、会場全体が凍り付いたとしても想像に余りある。

ホーヴェはさらにエルミールとタルチュフが「恋に落ちる」と解釈しエピローグを付けた。舞台に登場人物が勢ぞろいした8か月後、観客はエルミールとタルチュフの間に子供が生まれていたことを知るのである。映画製作会社パテによる劇場配信予告で「衝撃的な演出」「爆弾」「大胆不敵」「緊張の張りつめた舞台」と各紙がコメントしたが[24]、エルミールとタルチュフの間に密かに性的な興奮が生まれるところを目の当たりにしていた観客は、最後にもう一度衝撃を受ける。

この演出は、2023年1月31日から3月19日まで再演される。2022年6月1日から発売が始まった1月31日から2月28日までの公演は各公演日1から2席を残して完売である。如何に観客の興味を惹く演目であることか明らかである[25]。

・『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』

演出：ジュリー・ドリケ

主な俳優：ジャン・バティスト・ポクラン、モリエール（クレマン・ブレッ

ソン)、マドレーヌ・ベジャール、ベジャール嬢(フローランス・ヴィアラ)、アルマンド・ベジャール、モリエール嬢(アドリーヌ・デルミ)、シャルル・ヴァルレ、ラ・グランジュ(セバスチャン・プドゥルー)、ギヨーム・マルクロー、ブレクール(ローラン・ストケール)、マルキーズ=テレーズ・ド・ゴルラ、デュ・パルク嬢(エルサ・ルポワーブル)、フィリベール・ガソ、デュ・クロワジー(セルジュ・バダサリアン)、カトリーヌ・ルクレール・デュ・ロゼ、デュ・ブリ嬢(ポリーヌ・クレマン)

観劇:11月8日

モリエール生誕400年に際し、2020年、エリック・リュフから依頼されたジュリー・ドリケがジュリー・アンドレ、アガット・ペイラールと共に創作した芝居である。ジュリー・ドリケはモリエール劇団のいた時代の役者たちの私生活に興味を持った。どのような生活空間で、どのように共同生活をしていたのか。役者同士の交流、夫婦の生活、子供の教育、食事、洗濯は男女別か等である。モリエールの私信が残されていない中、ジョルジュ・フォレスティエをはじめとする数々のモリエール及びその時代の資料から、演劇界の現実、劇団の運営状況、調度品、遊び、メンバーとその関係、言葉、建築、パリの街、衛生状況、食事などを検証していった。そしてモリエールの生涯、自伝ではなく、ある一つの時期をフォーカスした作品にしたいと考え、1662－63年に焦点を当てた[26]。『女房学校』が成功した時期である。この作品の成功が他の劇団の嫉妬を呼び起こし『女房学校』論争が起こった。『女房学校』を批判する芝居に対し、モリエールは『「女房学校」批判』、『ヴェルサイユの即興劇』で反駁した。ドリケはこの三作品からモリエール劇団の日常を芝居にすることにしたのである。

登場する劇団員は座長のジャン・バティスト・ポクラン、モリエール、盛名座立ち上げ時からの同志マドレーヌ・ベジャール、妻アルマンド・ベジャール、モリエールの右腕ラ・グランジュ、マルキーズことデュ・パルク嬢と、この後彼女と共にオテル・ド・ブルゴーニュ座に移籍するブレクール、そしてデュ・クロワジーとその娘アンジェリック(11歳)、デュ・ブリ嬢とその息子ジャノ(9歳)である。

舞台はモリエール劇団員が住んでいたと想定した2階建ての家である。2階には夫婦や劇団員、子供たちの部屋がある。1階には洗い場と台所、食堂があり、劇団員たちは芝居が終わった後、ある者は洗濯や物干し、ある者は

食事の用意をしたりワインを飲んだりしながら議論する。ギターを弾き語ったり、他愛もない冗談交じりの歌を歌ったり、街に繰り出しテンションが上がりながら戻ってテーブルに着いたり、役者たちの日常が展開される。家の外の喧騒も聞こえてきて、当時のパリの街中を想像することができる。またモリエールとアルマンドの新婚の様子も見られる。

第一部は『女房学校』論争ただ中の公演後の役者たちの様子を表現した。公演後の興奮冷めやらない状況の役者たちの話し合いは、時にヒートアップし口論にまで及ぶ。役者たちの議論は、その日の芝居の反省会に始まり、芝居が下手な女優の進退を決めたり、芝居の才能に応じて報酬が変わるさま、配役をめぐる口論、それぞれの持つ葛藤が描かれる。劇団の経済状況、ヒエラルキーも垣間見られる。

第二部はルイ 14 世から突然新しい芝居を所望され、数時間後の公演にパニックを起こす劇団員たちの焦りが描かれる。後に『ヴェルサイユの即興劇』と名付けられる芝居の骨組みに、どうやって即興で演じていくかモリエールを中心に立ち稽古をしながら台詞を頭に入れ、作り上げていく様が描写される。

ドリケは役者たちに、それぞれ自分に割り当てられたモリエール劇団のメンバーを調べて参考にするように伝えたと言う[27]。ドリケは史料に基づいて作っている点において真実であるが、実際のところはどこにも記されていないのでフィクションであると言う。史実に基づく舞台背景が我々に 17 世紀の臨場感をもたらす。史実そのものというより真実らしさが演技、芝居の世界観を豊かにする。つまり真実らしさは、「芸術的であると同様に人間の、現在を生きる我々の劇団にもありがちな主題が提示されている[28]」だけにより現実味を増す。ドリケはこの舞台に、2022 年の現在に引き継がれるものを作りたかったと言う[29]。舞台上のモリエール劇団の対話は、現代フランス人の日常そのもののテンポの良さである。観客の笑いを誘い、役者が客席を通って舞台に上ったりする世界観とリズムはまるで観客もその議論の中にいるかのような臨場感を与え、ワクワクさせるものであった。モリエールを知る映像資料と言えば今でも 1978 年のアリアーヌ・ムヌーシュキンの映画『モリエール』が筆頭に挙げられるが、ドリケの舞台はそこにより身近に感じる生き生きとしたモリエールの日常の 1 ページを、我々に提示したと言えよう。

IV. モリエールは過去の遺産か今を生きる遺産か

コメディ・フランセーズにおけるモリエール作品の演出は現代的なものが多い[30]。「モリエール年」のリシュリュー館の演目7作品のうち、時代考証を多少なりとも意識した演出は『病は気から』だけである。『町人貴族』の衣装は貴族文化を思わせるものであるが、ジャズをベースにした光と音のエンターテインメントになっていた。そしていずれの演出も現代的台詞回しであった。『人間嫌い』の舞台の大邸宅とそこに出入りする登場人物は19世紀のチェーホフを思い起こさせる世界観である。『守銭奴』は第二次世界大戦後のスイス、レマン湖にある豪邸が舞台であるし、『タルチュフあるいは偽善者』も舞台の世界観は現代である。

では朗誦法を含む当時の再現を舞台上に復刻することはないのかというと、コメディ・フランセーズとは別であるが、1990年代から始まっている。ウージェニー・グリーンの流れを汲むバンジャマン・ラザールは2005年『町人貴族』を上演し話題を呼んだが、その後、オペラへと転向していき、モリエール作品の新たな演出はない。2022年に上演されたのは次の三つの劇団である。

2006年に創設したカンパニー・オグマは本拠地ドルドーニュ地方を中心にバロック期、ルネサンス期（15～17世紀）の劇作品と音楽を当時の朗誦法、演劇法を再現して上演しているプロの劇団である。2022年5月21日にはパリ、マザリーヌ図書館の協力で『ル・バルブイエの嫉妬』*La Jalousie du Barbouillé* を上演した。2017年に発足したテアトル・モリエール・ソルボンヌは名前の通り、ジョルジュ・フォレスティエのもと、パリ第4・ソルボンヌ大学（現ソルボンヌ大学）の後援を得て作られたバロック演劇養成学校で、文献学に基づいた17世紀の演劇法の研究と実践を行っている。役者の演技、朗誦法の他、音楽、舞踏、衣装、舞台装置なども含めている。2022年『病は気から』をヴェルサイユ宮殿王室歌劇場、国立図書館、パリ大学都市で上演した。2023年2月にはヴェルサイユ・モンタンシエ劇場公演がある。また、パリ・アテネ劇場ではミシェル・フォーの演出で5月6日から29日『ジョルジュ・ダンダンあるいはやり込められた亭主』が上演された。1668年のルイ14世のヴェルサイユの祝宴での公演を意識した演出で、通常三幕散文の部分しか上演しないものに幕間劇を含めた「音楽とバレエ付き喜劇」である。

当時を再現した演出は、創作時の世界観を体感、あるいはモリエールがその作品を創作し上演した真意を直に感じることができる。現代的演出、朗誦法ではしっくりこなかった部分が、当時の衣装、舞台装置、朗誦法、演技が伴った時、初めて台詞と芝居がつながるところがある。ジョルジュ・フォレスティエとミカエル・ブッファーは今できる最大限の再現をしたと言う[31]。ただ当時の演出の復興には障害がある。脚本は一定の上演期間が終わって、出版されると手書きの脚本は捨てられる 。演出のメモなどは残っていない[32]。さらに朗誦法、記譜法の資料は1700年まで待たなければならないため、モリエールの時代の技法は推測の域を出ない[33]。10年後、20年後、新たな発見があったとき塗り替えられるのだ。現代的に演出された舞台と比較した時、これらの演出は古典であり、文献学的見地からの愉しみということになるだろう。

現代的演出では演出家の数だけ多種多様に世界観が広がる。モリエールを知らなければ、400年前の劇作家の作品とは思わない新しさがある。フランス語を「モリエールの言葉」と呼ぶように、作品内のフランス語も現代の用法や意味に多少の違いはあれど、ほぼ現代フランス語である。モリエールの言葉を「聞きに」劇場に来る観客もいる。コレージュ版、リセ版には語彙や現代語とは異なる表現の説明が記されているが、普通に読むことができる。モリエールの扱う主題は人間の本質、社会問題で今も色褪せることなく観客の心に突き刺さる。演出ひとつで観客により近いものとなりうるのだ。

それは、フランス国立図書館[34]、パリ国立オペラ、国立舞台衣装センターがコメディ・フランセーズと共催して開催した展覧会にも通じる。

ムーラン市の国立舞台衣装センターで2022年5月26日から11月6日まで開催されていた「舞台衣装から見るモリエール」展、フランス国立図書館リシュリュー館における2022年9月27日から2023年1月15日までの「モリエール、演技の真と偽」展、パリ・オペラ座における2022年9月27日から1月20日までの「音楽の中のモリエール」展である。

「舞台衣装から見るモリエール」展ではクリスティアン・ベローやクリスティアン・ラクロワなどが手掛けたコメディ・フランセーズの舞台衣装をテーマごとに130点余り展示された。「モリエール、演技の真と偽」展では17世紀から今日までの公演時に配布されたパンフレットや版画、資料、絵画、舞台写真、衣装、舞台模型などを展示、「音楽の中のモリエール」展で

はシャルパンティエの自筆の『病は気から』の楽譜、振り付けの記譜をはじめとするコメディ・バレのポスター、版画、現在までの演出に関する衣装デッサン、舞台装置のデッサンなどが展示された。

モリエールの400年の受容を多方向から紹介しているのだが、すべてが、「今」に繋がっている。展示されているものは、初めて目にする当時のものから、かつて劇場に通って見た演目の衣装であったり、ビデオだったり、写真が飾られ、過去と今を繋げている。その時古典であり過去の遺産であったモリエールが現代の我々の前に生き生きと蘇る。

結論

本稿では2022年から2023年にかけてのモリエール年における通称「モリエールの家」、国立劇団コメディ・フランセーズに焦点を当てた。しかしスペクタクル情報誌やインターネット検索すれば毎日必ずモリエールの上演がある。それだけ演劇人の心を動かす劇作家である。

モリエールは古典の権威の一人である。それでもモリエールの生誕を記念するイベントに対してフランス人は「だって、モリエールだよ、モリエールは国民的作家なんだよ」と答える。

2022年1月15日のコメディ・フランセーズよるモリエール生誕祭の録画の中で、「あなたにとってのモリエールが意味するものは何か」という質問に、モリエール作品に惚れ込んでいる、その言葉が人生の指針となっていると答える人が多かった。中には生誕祭なのか没後祭なのかよくわからないがこれほど時間が経過しようともオマージュされる存在に興味を持って来たと話す若者もいた。

多くの偉大な作家を生み出したフランスの中で、モリエールがフランス人にとって他に類を見ない国民的作家というのなら[35]、それは彼が演劇人であるからであろう。作品の内容が過去のものであっても問題となっている社会批判や笑いには普遍性があり、現在生きている役者が体現して伝えるため「今」にリンクしている。そして作中人物が固有名詞化していることを考えると、モリエールは、時代を超えて受け入れられる国民的作家兼エンターテイナーと言えるのではないだろうか。

[1] 参照：Isabelle Calleja-Roque, « Ces comédies de Molière qu'on étudie encore et toujours à l'école », publié: 28 février 2022, https://theconversation.com/ces-comedies-de-moliere-quon-etudie-encore-et-toujours-a-lecole-177473. 2022年12月10日閲覧。

近年、古典文学離れの傾向にあり、学校でモリエールや他の古典作家を読まなくなってきている。執筆者が出会ったリセの教員たちの多くは、その傾向に逆らってもモリエールの作品を選ぶと言っていた。好まれるのは『亭主学校』や『人間嫌い』で反対に『タルチュフ』は難しいという。一番苦労するのは『ドン・ジュアン』ということだ。執筆者も教室での学生の反応から同様の感触を得ていたので、文化の違いではなく、世界共通の世代による価値観の変化に伴うものかもしれない。また、小学校最年長にあたる6年生（12歳）では今でも『いやいやながら医者にされ』を読むという。

モリエールの作品名についてであるが、日本語訳名はオディール・デュスッド、伊藤洋監修、エイコス編、『フランス17世紀演劇事典』、中央公論社、2011に倣う。またフランス語表記が統一していないのはプログラムに掲載された時の標記に準じているからである。

[2] モリエールは盛名座として活動を始める際、ジャン＝バティスト・ポクランではなく、ジャン＝バティスト・ポクラン、モリエールというサインを使った。「モリエール」誕生である。これは当時俳優業の評価が芳しくなかったため家族への配慮といわれている。

[3] 元々はルイ13世の宰相リシュリューが建築した城館でパレ・カルディナルと呼ばれていた。

[4] 劇団員はソシエテール（sociétaire 正座員）、パンシオネール（pensionnaire 準座員）で構成されている。ソシエテールの中で最も長く在籍している役者をドワイヤン doyen(ne)と呼び、劇団の運営に関しても大きな責任を持つ。現在パンシオネールは19名、名誉ソシエテールは22名。コメディ・フランセーズ公式サイトより。https://www.comedie-francaise.fr/fr/ （2022年11月28日閲覧）。コメディ・フランセーズのサイトは当劇団図書館によってモリエールについてのみならず劇団の今昔について詳細な紹介や論文が掲載されている。支配人の部屋の前の待合室の廊下には大理石で歴代のドワイヤンと支配人の名前が彫られているが、ドワイヤンの筆頭はモリエール、そしてラ・グランジュが続いている。

[5] ヴィユ・コロンビエ劇場は斬新な演出が可能だが、それはステュディオ劇場も同様で、リシュリュー館と5分（240m）ほどの距離にあるステュディオ劇場で公演をした後、リシュリュー館のソワレに出演する役者もいる。毎朝、リシュリュー館の1階関係者用エレベーター脇の壁にその日の入りから各公演を含めすべてのスケジュールが書かれた紙が張られている。

[6] 同年のパリ万博に合わせて修復が行われた。

[7] 役者の出入り口の階段にはラシーヌの胸像、会議室の暖炉の上にはヴォルテールの胸像が置かれている。また1階エレベーター脇には1799年国立劇団が現在の場所に移り、劇団の形態を整えた立役者であるタルマの像（エティエンヌ・ド・ジュイ

『シラ』のシラ役）が置かれている。これらはコメディ・フランセーズ見学時に閲覧可能。執筆者は10月15日参加。

[8] Agathe Sanjuan, « La fête moliéresque de la célébration nationale au Molière universel »、展覧会カタログ *Molière*, sous la direction de Laurent Decobert, Joël Huthwohl, Agathe Sanjuan, Bibliothèque nationale de France, Comédie française, Opéra national de Paris, éd. Bibliothèque nationale de France, 2022, p. 112.

[9] モリエールが生まれた正確な日は不明なので、洗礼を受けた日をもってモリエールの誕生祭としている。現在も明らかになっていない。

[10] この儀式はコメディ・フランセーズのリシュリュー館で行われるのが慣例であるが、その他オデオン座でも1822年から行われるようになった。*Ibid*., p. 116-117, *sq*. 1880年にはコメディ・フランセーズ設立200年祭も執り行われた。生誕、死後の記念祭ではないが、ルイ・フィリップ1世はモリエールを国民的作家と定め、ナポレオン・ボナパルトは1852年1月15日に劇作家生誕230年を記念した上演をコメディ・フランセーズに正式に依頼した。文化政策として美術省がコメディ・フランセーズに基金を出すなど国も積極的に支援している。アカデミー・フランセーズ、ソルボンヌ大学、ルーヴル美術館、国立図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、パリ市庁舎等の教育機関、図書館、公共施設にはモリエールに関する資料が揃っている。パリ以外にもモリエールが長く逗留し洞察力を磨いたとされる南仏ペゼナス等、劇作家所縁の地ではそれぞれがモリエール関連のメモリアルを催している。*Ibid*., p. 120, *sq*. ; Joël Huthwohl, « Rien ne manque à sa gloire… Molière sur scène du XVIIe siècle à nos jours », *id*., p. 199-212.

[11] 国立図書館主催展覧会「モリエール、演技の真と偽」展より。同展覧会カタログ *Moli*ère, *id*., p. 119 参照。

[12] コメディ・フランセーズ録画「22, V'Là Molière」、
https://www.youtube.com/watch?v=HLGoRMosgf4 （2022年12月10日最終閲覧）。現在も視聴可能。コメディ・フランセーズはこれまでもインターネット配信を行っていたが、2020年、コロナウイルス感染拡大によるロックダウンが始まってすぐの3月30日から様々な企画をウェブ上で配信し、多くの人々の心を救ったことは特筆すべきことであろう。演劇好きの人にはもちろんのこと、新しいファンを取り込むことにも成功した。全世界に発信されたことにより、海外からのアクセスも全体の19％を占めているという。演劇がいかに人間にとって必要なものであるかを示しているようだ。一人の人間として、演劇人としてのモリエールを見つめると、コメディ・フランセーズのこれらの動きに、支配人エリック・リュフの才能と行動力はもとよりモリエールの精神が脈々と引き継がれていることを感じる。2021年のオマージュはコロナ禍のため初めて観客なしで行われた。

[13] コメディ・フランセーズ教育部長マリンヌ・ジュバンの説明より。前掲録画「22, V'Là Molière」参照。

[14] 執筆者は正座員からの招待で出席するが、もし当日券を求めるとしたら20時30分からの公演におそらく17時前から並ばないと入手できないのではないかと想像する。

[15] Molière, *Tartuffe ou l'hypocrite*, comédie en trois actes restituée par Georges

Forestier, Portaparole, 2021.

[16] モリエールの挑戦ともいえる『タルチュフ』作成とその真意、そこに映し出される当時の様子は拙論「モリエールのドラマツルギー～ Défi 挑戦～『タルチュフ』と『ドン・ジュアン』」大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学会『コミュニケーション文化論集』第 16 号、p. 61-80 参照。

[17] 詳細は以下を参照。Molière, *Œuvres complètes*, tome II, éd. Georges Forestier, Pléiade, 2010, p. 1354-1367, Molière, *Tartuffe ou l'hypocrite*, comédie en trois actes restituée par Georges Forestier, éd. cit., p. 8-9. 前出拙論「モリエールのドラマツルギー」の時点では五幕中最初の三幕が上演されたという解釈から考察したが、フォレスティエ版より衝撃は少なく幕切れは悪いものの、かなり痛烈な終わり方であることには変わりはないことを付記しておく。

[18] Molière, *Tartuffe ou l'hypocrite*, éd. cit.

[19] モリエールがルイ 14 世の上演許可を得るために変更した個所とも言われている。

[20] « Rencontre avec Ivo Van Hove et Jan Versweyveld », 劇場配布パンフレット *Le Tartuffe ou l'Hypocrite*, p. 11.

[21] *Id.*, p. 11.

[22] *Id.*, p. 11.

[23] *Id.*, p. 10.

[24] この公演は映画製作会社パテにより、初演の 1 月 15 日当日は劇場での同時配信、2 月 6 日から限定配信が始まった。コメディ・フランセーズ『タルチュフあるいは偽善者』映画配信予告参照：https://www.youtube.com/watch?v=lNNtKsMdjJk 2022 年 12 月 10 日最終閲覧。

[25] コメディ・フランセーズと映画製作会社パテが映画館で限定放映したことにより、フォレスティエがコメディ・フランセーズを相手取りこの『タルチュフ』の著作権を求めて訴訟を起こしたことを 2022 年 10 月 25 日、ラジオ・フランスが報じた。双方の主張に対し、業界内、ネット上で様々な意見が交錯している。コメディ・フランセーズはそれでも 2023 年上演を続行することにし、さらなる話題を呼んでいる。

[26] 国立図書館主催講演会「モリエールを演じる」、ジョエル・ユースウェル司会、フィリップ・コベール、ジュリー・デリケ対談、11 月 14 日フランス国立図書館リシュリュー館オーバル・ホールより。

[27] 同上。

[28] Agathe Peyrard, « Comme un diptyque documentaire », [in] *Jean-Baptiste, Madeleine, Armande et les autres…*, d'après Molière, coll. *L'avant-scène théâtre*, N°. 1526, 2022, p. 68.

[29] 前掲国立図書館主催講演会「モリエールを演じる」より。

[30] 1680 年の設立から 1978 年までに上演された演目を見ると上位 10 位までにモリエールの作品は 8 作品含まれている。そして 17 世紀フランス三大劇作家コルネイユ、ラシーヌに大きく差をつけてモリエールの作品が上演されている。1 位のモリエールは 2 万 9664 回、2 位のラシーヌは 8669 回、3 位のコルネイユは 7019 回（Sylvie Chevalley, *La Comédie-Française hier et aujourd'hui*, Didier, 1979, p. 613-614, 前掲書、『フランス 17 世紀演劇事典』および拙論「モリエールのドラマツルギー～プレ

リュード～『女房学校』論争」、コミュニケーション文化論集、第 15 号、2017、p. 15-16 参照）。モリエールの作品は劇作家の死後も彼の演出がそのまま継承されていたが 1740 年代になると観客が飽きてしまい、劇場離れする現象が起きたという。そこでしばらくはモリエール上演をやめていた時期もあった（Marcial Poirson, *Molière - La fabrique d'une gloire nationale (1622-2022)*, Seuil, 2022, p. 74.）。

[31] パリ大学都市におけるモリエール 3 部講演のひとつジョルジュ・フォレスティエ、ミカエル・ブッファー 12月1日講演、「『病は気から』上演の昔と今：何が問題か」より。

[32] 『ジャン・バティスト、マドレーヌ、アルマンドと仲間たち』第 2 部およびモリエール『ヴェルサイユ即興劇』から分かるように劇作家兼役者であるモリエールが牽引して役者たちと作品を作り上げた。唯一最後の作品『病は気から』のみいくつか当時の演出が残されている。それはモリエールが新作として上演を始めて 4 日目に亡くなったからで、オペラ座「音楽の中のモリエール」展でも展示されていたが、音楽を担当したシャルパンティエの自筆の楽譜、ト書き等のコメントが残されている（同上講演会「『病は気から』上演の昔と今：何が問題か」パリ大学都市におけるモリエール」より）。

[33] 振付家、舞踊教師ラウール＝オージェ・フイエが、ピエール・ボーシャンの考案した舞踊の記譜法を改良し 1700 年記譜法を執筆した。『コレオグラフィ、あるいは人物・図形・指示記号による舞踊記述法』*Chorégraphie, ou l'art de décrire la danse par caractères, figures et signes démonstratifs* である。ボーシャンとフイエによる舞踊の記譜法は「ボーシャン＝フイエ記譜法」と呼ばれる。ボーシャンはルイ 14 世のバレエの師であり、モリエール劇団の首席振付師を勤めた。

[34] 国立図書館はサイト内に「モリエール」特別企画を準備したが、そこには国立図書館所蔵の版画、初版本、各世紀に出版された版、学術書の紹介のほか、芝居の音声、映像も多く無料で紹介されている。音声、映像を担当したオードレイ・ヴィオーによると映像権に関して様々な協力と許可を取るのが最も大変であったという（国立図書館 10 月 18 日討論会、シリーズ国立図書館電子サイト『Gallica』紹介「モリエールの 1622 年から 2022 年。国立図書館 400 年の資料」より）。これらを可能にしたのはフランスの文化政策の賜物であることは言うまでもない。研究者以外、いや研究者にとってもハードルの高い多くの資料に無料でのアクセスを可能にした文化の共有と伝播は、文化国家にとっておいて非常に大きな意味を持つ。

[35] モリエールが他に類をみない国民的作家であるという表現に違和感を持つ人もいるだろう。例えば 2021 年生誕 150 年、2022 年没後 100 年を迎えたフランス最大の作家と称されるプルーストに関して多くの企画が話題になっていることを紹介しておきたい。パリでは、16 時間に及ぶ朗読会、プルーストが避暑地ノルマンディーに行くために使ったパリ、サン・ラザール駅内での朗読会、国立図書館での過去最大規模の展覧会などがある。プルーストの家がある通りには「マルセル・プルースト」の標識プレートが新たに掲げられ、埋葬先の墓地では彼の遺族が出席した記念式典が行われるなど大々的なイベントが目白押しである。文化的イベントではないが、フランス郵政公社からモリエールの記念切手は 2 種類発行されたがプルーストも 1 種類発行されている。しかしパリ造幣局で 2021 年から始まった、詩人、劇作

家、小説家の記念硬貨造幣企画「偉大な作家シリーズ」はラ・フォンテーヌ、ダンテ・アリギエーリを皮切りに、2022年はモリエール、2023年はシェイクスピアと続く。モリエールの記念硬貨は4種類、5€金貨（79€）500枚、50€金貨（700€）500枚、10€銀貨（75€）3000枚、20€銀貨（110€）3000枚である。プルーストの記念硬貨はつくられない。

また、コメディ・フランセーズでは6ヶ月間モリエールの作品のみを上演したが、それを決定したエリック・リュフは、シェイクスピアやユゴーもモリエールに匹敵する劇作家であろうが、それでも作品の内容、笑い、メッセージ性においてモリエールは特別であると語っている。やはり様々な側面から見てもモリエールは特別な存在といえるだろう。